

LESSON 27

ゴールデンサークルの「Why（目的・存在意義）」が十分に伝わっていない箇所と、その原因は、資料内の「事務局メモ」から以下の3点に集約されます。

1. Whyが十分に伝わっていない箇所とその原因

① ミッションの表現が抽象的で共感を呼んでいない

- ・ 箇所：「私たちのミッション：『自然との対話を通じて、地域に根ざした学びの循環をつくる』」というスライド。
- ・ 原因：「自然との対話」「学びの循環」という言葉が抽象的すぎるため、現場への浸透度が低く、ボランティア説明会で読み上げても反応が薄い状態になっています。

② 「何のために存在するのか」が文書化されていない（属人化）

- ・ 箇所：「活動を支える考え方と事業」のスライド。
- ・ 原因：組織の根本的な存在意義が文書化されておらず、代表の情熱的な語り口に依存しています。そのため、新人スタッフやボランティアへ理念を伝達する際、代表以外の人と話すと毎回うまくいかないという課題が生じています。

③ 設立の経緯に対する「代表の想い」と「事務局の事情」の乖離

- ・ 箇所：「設立の経緯——なぜ作ったか」のスライド。
- ・ 原因：代表は「子どもたちに豊かな自然を」という情熱をWhyとして語りますが、事務局は「行政事業（補助金）終了の危機から、継続できる仕組みを求めて法人化した」という実務的な経緯を重視しています。この理念の不一致により、理事会でも根本的な話し合いが流れてしまっています。

2. Whyをより明確に伝えるための表現改善案

現在の「Why」は、代表の個人的な情熱にとどまっており、組織全体の共通言語になっていません。これを解決するための表現改善案を提案します。

改善案A：代表の「情熱」と事務局の「持続性」を統合したストーリー化 代表の「子どもたちへの想い」と、事務局の「継続させたい想い」は対立するものではありません。この2つを組み合わせたストーリー（設立背景）として文書化します。

・【改善案の表現】

「私たちは、子どもたちが豊かな自然に触れ合える環境を守りたいという想いからスタートしました。しかし、行政の補助金頼みの活動では、ある日突然その場が失われてしまう危機を経験しました。だからこそ私たちは、行政の枠組みにとらわれず、自分たちの手で『持続可能な学びの場』を地域に残していくために法人化を決意したのです。」

改善案B：ミッション（抽象語）の具体化とターゲットの明確化 ボランティアが「自分は何のためにこの活動に参加するのか」をイメージしやすいよう、現在のミッション（自然との対話、学びの循環）をより具体的で日常的な言葉に翻訳します。

・【改善案の表現】

- ・現在のミッション：『自然との対話を通じて、地域に根ざした学びの循環をつくる』
- ・改善案（メインコピー）：『子どもたちの日常に、自然と触れ合う原体験を取り戻す』
- ・サブコピー（学びの循環の具体化）：『地域の人々と共に土に触れ、生き物を観察する体験を通して、次世代に豊かな環境と生きる力を手渡していきます』

改善案C：対象者（誰のために）の明記 Whyを語る際、「誰の課題を解決したいのか」を明確にすることで、活動のベクトルが揃います。

・【改善案の表現】

「自然から遠ざかってしまった現代の子どもたちに（ターゲット）、地域住民と一緒に土に触れる『場』を提供することで（アプローチ）、自然を大切にすることを育む（ゴール）。」

このように、抽象的なスローガンを避け、「誰のために」「なぜ私たちがやるのか（補助金切れの危機を乗り越えた強い意志）」を誰もが語れるレベルで文書化することが、今の組織には必要です。

これらの改善案をもとに、新人ボランティアや寄付者向けに「組織のストーリー」を伝える短い説明文（エレベーターピッチなど）を作成することもできますが、いかがでしょうか？